

パウル、ナトルプ、「ペスタロッチの理想主義」

一九一九年」を讀む

長 田 新

—

ナトルプがヘルバルト・ペスタロッチ及び現今の教育學問題 Herbart, Pestalozzi und die heutigen Aufgaben der Erziehungslehre といふ一書を公けにした。一八九九年は、近世教育學史上に於て重大の意味ある年であつた。此書は僅か百五十頁の小冊子で、一八九七八兩年に互つてナトルプがマルブルヒの夏季講習會で述べた八回の講義の公刊であるが、これに依て第十九世紀の中葉以來殆ど教育學界の寵兒と呼ばれたヘルバルトが最後を遂げ、新たにペスタロッチが蘇へつて來た。表象力學說に足場を築いてゐたヘルバルトの教育學が、人間の「根本衝動」に深く根をおろした一種主意的なペスタロッチの教育說に復歸しやうとしたこの新運動が、所謂「カントに歸れ」といふ當代一般

の思潮の一反映なりしことは、氣運をかくヘルバルトよりペスタロッチに回轉させた當人が、ナトルプといふ新カント派の一頭目であつたことよりも容易に察することが出来やう。

一半をヘルバルトの攻撃に、そして他の一半をペスタロッチの祖述に當てたヘルバルト、ペスタロッチ及び現今の教育學問題の公けにさるゝや、ヘルバルト派の驍將はこゝを先度と何れも咎敵ナトルプに矢を放つた。即ちラインの編輯に係る、哲學及び教育學雜誌第六年第四冊の實に六十頁を割いて、ライン自らはナトルプの教育説をフリーゲルはその心理説を、ユーストはその倫理説を攻撃した。當時兩派の論争は甚しく極端に走り、僅かに彼のブラーグ大學のウイلمان教授が、ラインの「哲學及び教育學雜誌」に發表した「ヘルバルト教育學に對する新カント派」と題する公正の所論を例外とし、ナトルプ自身の如き激叩の餘り同誌第五冊に於てフリーゲルの言葉尻まで捕へて論を戦はした。ラインやフリーゲルやユースト等が主家のために拔んでた忠勤も、時代の大勢とカント哲學を武器とするナトルプの鋭鋒とには遂に抗し難く、一八九九年の悲愴なる弔合戦を最後として、ヘルバルトの教育説は第十九世紀の幕と共に一旦教育學術の舞臺面から退いた。

一八九九年「ヘルバルト・ペスタロッチ及び現今の教育學問題を公けにして、學界の氣運をヘルバルトよりペスタロッチに回轉せんとしたナトルブは、同じ年主著「社會的的教育學を公けにしたのであるが、彼の社會的教育學はペスタロッチの教育說中特に「鶴の歌 [Schwanengesang] に明瞭に現はれてをる「生活による教育」ペスタロッチ自からの標語によれば「生活が陶冶する Das Leben bildet」といふ教育原理を發展し、且つ理由付けるに新カント派の哲學を以てせるものである。この意味に於て教育學者としてのナトルブの使命は、ペスタロッチの祖述と發展とにあるとも云はれ得る。「社會的教育學」を公けにしたナトルブは、其後續いてペスタロッチ研究の事に従ひ、一九〇九年には「ペスタロッチ、其生涯と思想 Pestalozzi, sein Leben und seine Ideen」といふ書を公けにしたのであるが、彼が尙ほその中に「余がペスタロッチ研究の事は、むしろ今後のことゝ屬す」と云ひをるところから見れば、彼がペスタロッチ研究の事業を如何に重要視しまた難問題視しをるかゞ判かるであらう。

二

私が茲に紹介しやうとする「ペスタロッチの理想主義 Der Idealismus Pestalozzis」は、一九

一九年ライプチヒの出版で、ナトルプに取つては從來のペスタロッチ研究の續きたること云ふまでもないが、而かも同時に「余がペスタロッチ研究のことは、むしろ今後のことに屬す」と云つたその前約の正しく果たされたもので、ナトルプ自からも「余は始めてペスタロッチの完全な圓熟した理解が出来、またペスタロッチの業績の最後の意味が明かになつたと信ずる」と云ひをるところから見て、此書は單にナトルプに於けるペスタロッチ研究事業といふ比較的限られたる意味に於ては、實に教育史上に重大の意味ある著作と云はねばならぬ。

教育史上文献の多きこと恐らくペスタロッチに關するものゝ如きは他にあるまい。その數多い文献のうち特に注目すべき一二を數へたら、やゝ古きものにはザイフェルトの「ペスタロッチの書簡」、イスラエルの「ペスタロッチ傳」、モルフの「ペスタロッチ傳」があり、比較的新らしきものではホイバウムの「ペスタロッチ一九一〇年」とウイゲットの「ペスタロッチ教育説の基礎一九一四年」とを白眉とする。けれど此等の研究は何れも叙述が詳しいとか根據が確かだとか乃至はペスタロッチに對する同情が深いとか云ふまで、所謂レールマイスターたると同時に、哲學者であり詩人であり社會學者であり豫言者であつた彼れの思想の全面を綜合統一した研究といふものはない。ナトルプが

從來のペスタロッチ研究を評して「此等はいはゞ建築用材を集めたといふまでのこと
で、建築そのものは未し」と云つてをるのは正當である。けれどペスタロッチの思想の
特徴から見て、その全面を綜合統一することの決して容易の業ならざることば、ペ
スタロッチ研究者を以て我れも人も許してをるナトルプ自身さへ一度は彼のラインの
教育辭書に於て「ペスタロッチの思想には組織がない。いはゞ生活の流と共に轉々し
た。經驗より直接奔り出でたる思想の豊富と潑瀾とは、竟にシステムといふ桎梏を
拒んだのである」と云つてをるのを見ても明かである。

けれどペスタロッチの眞の研究は、竟にシステムの桎梏を拒んだといはるゝその複
雜豊富な全思想を、ある一點を中心として綜合統一するところになくはならぬ。
そしてナトルプ自からが「彼(ペスタロッチ)の教育説の哲學的基礎の新研究 Eine Neun-
tersuchung der philosophischen Grundlagen seiner Erziehungslehre」といふ又の名を附して公けに
した「ペスタロッチの理想主義は、ナトルプが自からも公言してをるやうに、ペスタロッチ
の「完全な圓熟した研究であり、また全思想の統一的な根本的な即ち謂ふところの「哲
學的な「新研究」なのである。

從來「システム無し」と刻印され來つたペスタロッチの教育説を哲學的基礎の上に綜合統一せんと企てたナトルプは、先づペスタロッチ教育學と呼び得る理論がありとするならば、その理論の根據は哲學的か乃至は經驗的か、また假りに哲學的とするならば、それは時代の哲學の一般的影響に依るものか、それとも彼自からに固有のものであつたかといふ問題を提出し、且つ經驗的色彩の濃厚なペスタロッチの教育説に飽くまで哲學的基礎の存在することを主張せんとしたナトルプは、上の諸問題に答へる豫件として「哲學的か philosophisch 經驗的か empirisch」といふ問そのものゝ曖昧なることを指摘して次のやうに論じた。そも「哲學的か經驗的か」といふ問そのものゝ妥當を缺くことはペスタロッチの教育説が哲學的基礎を有すと主張する人が、必ずしもペスタロッチの教育説に於ける經驗的基礎を拒み得ないしまた拒むを要せないといふことから明からである。カントは純粹理性批判に於て「一切の吾々の認識は經驗と共に始まる」と云ひ、プロレゴメナの附録に於ても「事物の一切の認識は……經驗に於てのみ眞理である」と云つてをるが、悟性と經驗との關係、または哲學と經驗と

の關係は、もと不可分ののもので、ペスタロッチの思想に於ても敢て煩雜な例證を試みるまでもなくこのことが云ひ得らるゝのである。

ペスタロッチの教育説が哲學を缺くといふことは、古來多くの教育史家の一致するところであつたが、ナトルプは飽くまで哲學の存在を主張し、特にカントと對照しカントに結合せんと努めてをる。學説そのものに於ける哲學的基礎の穿鑿は後に譲り、ペスタロッチの生涯には彼の思想が哲學的洗禮を受けねばならぬ多くの機會があつた。其一はチューリヒ大學で受けたラルフ哲學の影響であり、其二はライプチヒに於ける獨逸思想家との交際であり、其三は肝膽相照らしたフヒテとの接觸であり、其四はペスタロッチの臍股の臣とも云ふべき哲學者ニードラーの患言である。

ペスタロッチがチューリヒ大學に學んだ當時、この大學に最も勢力のあつたのはカントの師クリスチャン、ラルフの哲學で、ペスタロッチはこの雰圍氣のうちに熱心に勉強したとのことである。一七八七年、リーンハルトとゲルトルードの第四卷公刊後文筆生活が全然失敗に終り、従つて陥つた無一文の貧乏生活は、十年の久しい間多感の彼をノイホーフに沈黙せしめたのであるが、その間最も注意すべきは彼がライプチヒに行つてクロブストック・ゲーテ・フイーランド・ヘルデルさてはヤコビ等當時の思想界

に時めいた幾多の藝術家哲學者と交はつて獨逸の理想主義的思想の洗禮を受けたことである。若し夫れ彼とフイヒテとの交はりに至つては取りわけ濃厚なものがあつたので、一七九七年には彼は數日の長き間フイヒテと同居し、哲學や教育に就て互に談を交はし合つた。またフイヒテがチューリヒに滞在して居た頃二人の往來は殊更繁かつたこのことであるが、かく二人を力強く引き付けたマグデットの一つは、固より史家の云ふやうに二人の夫人が互に親友であつたといふことであらうが、余は更らに大きな理由として兩者に於ける思想上の一致もしくは共鳴を數へる。フイヒテの教育思想をうかゞふ唯一つの著作とも云ふべき彼の「獨逸國民に告ぐ」に於て、讀者はペスタロッチの名前が如何に屢々引き合ひに出さるゝか、またさなくとも如何に多くのペスタロッチ的思想の散見し居るかに驚くであらう。また一七九七年ペスタロッチの公けにした「人類發達に於ける自然の行路」が著しく哲學的色彩を帯び來つたのは、フイヒテの忠告に基くものと一般に云はれてをる。イフェルテン時代のペスタロッチに助勢し、特にペスタロッチの思想を哲學化するに與つて力あつたのは、ニードラーであるが、彼がニードラーと相知る遙か以前、即ち一七九四年ペスタロッチは彼の思想が本質上カント哲學の結果に著しく接近しをる」といふことをフイヒテから聽いて少か

らず喜んだといふことである。かく觀來ればナトルブが「ペスタロッチの理想主義」の全篇に亙つて力説せんとしてをるペスタロッチ教育説に於ける哲學的基礎は、少くとも彼の生涯の來歴より見て、極めてプロバブルのことではないか。

四

ナトルブは論をすゝめて、經驗に基づくペスタロッチ教育説の哲學的基礎は然らば何であるか、ペスタロッチは何處までそのその哲學的基礎を意識し且つ定式化したか、またその哲學的基礎は直覺的即ちヘルデルの謂ふところの本能的 *instinktiv* なものであるか、それとも何等かの形に於て論理的發展が、試みられてをるか、といふやうな問題を提出した。これに對するナトルブ自身の回答は極めて明瞭でありまた大膽である。すなはちペスタロッチ教育説の哲學的基礎は飽くまでも獨逸哲學本來の理想主義的認識概念 *Der idealistische Erkenntnisbegriff* にある。そしてこの哲學的基礎はペスタロッチの全思想を貫く主流であつて、ペスタロッチ自からも明瞭にこれを意識し且つ定式化した。たゞその意識の仕方と定式化の仕方とに至つては、ペスタロッチの性格と思想とに裏付けられて彼自身に獨自のものであつたことは云ふまでもな

い。蓋し分析的な哲學に對しては、もと／＼同情も無ければまたその資格も無かつた彼の思索の態度は、勢ひ綜合的であり直覺的であり、従つて彼は自己の所得を嚴密な論理に照らして發表せんとはしなうたのである。彼の立説の態度が總じて認識批判的先驗哲學的でなく、むしろ心理的であつたのも、畢竟ペスタロッチの性格と思想とに於けるかゝる特徴から來た自然の道行である。

五

さて第十八世紀のむしろ中葉以後に於ける彼の啓蒙運動の繼承者を支配した時代思潮の一般的影響を受けて、ペスタロッチは人間意識の根本、従てまた人間教化の根本をば、理想主義的認識のうちに求めた。ペスタロッチの教育説が認識概念に深く根をおろして居たことを先づ明かにせんとしたナトルプは人間精神の諸相に對するペスタロッチの見方を次の如く説明した。ペスタロッチは當時の多くの獨逸哲學者のやうに一應人間精神に思惟と感情と意志との三者を區別しながら、而かもなほ明瞭にこの三者の統一的一體なることを述べてをる。すなはちペスタロッチに従へば意志と感情との間には切り離すことの出来ない内部的の關係があつて、未だ意志たら

ざる感情は、言はゞ意志たるべく十分な熱度を具へぬ感情に外ならない。而かも一度意志となれば、それは既にそのうちに目的方向への統一を含み、且つ目的方向への統一といふことは目的意識といふ意識の事柄となるのであるから、結局認識から切り離すことが出来ない。思惟は亦感情が意志となり意志が努力となつて發動するその努力に参加する意識であるから、人間精神の三つの相としての思惟と感情と意志とは、要するに人間意識の最後のある源が流れ来る異なる光に過ぎぬといふことになる。ペスタロッチはその處女作「隱者の夕暮 Abendstunden eines Einsiedlers」に於て早くもこの問題に觸れてをる。「隱者の夕暮」に於て眞理の問題を取扱つてをるペスタロッチは、眞理を以て人性の内部に潜み而かも何人も否定することの出来ない眞理心 Wahrheitssinn の創造するところと見てをる。この眞理心はペスタロッチ自ら説明するところに依ても明かなるが如く、吾々が眞理を認識するその認識の力である。

ペスタロッチ教育説の一つの中心概念は直観 Anschauung の原理である。彼の直観はルソーや汎愛派の直観の如く單なる外部的のものではなくて、「内部の心 inneren Sinn」としての認識能力に深く根ざしてをる。直観は一種の認識ではあるが、それは心の内なるある中心より来る認識すなはち内観 Inneres ではなくてはならぬ。普

遍的なまた必然的な真理の認識に對してペスタロッチの直觀の原理の權威あるはその直觀がかく「内部の心」としての認識能力に深く根ざしてをるからである。ペスタロッチはかく真理の問題を認識の内的基礎の上に打ち立てたばかりでなくて、人間諸行為の源をなす信念、すゝんでは宗教の本質までも根源的なる認識概念に依て裏付けた。即ち信念は單なる認識ならざること固よりであるが、さりとてまた認識でないとは云はれない。蓋し信念の内容はこれを信する者に取つては動かすことの出來ない真理であるといふ意味に於て、信念も亦結局一の認識——根源的な認識である。宗教の本質に就ての彼の考が認識的基礎の上に立つといふことは、彼が宗教の本質を一種の内部判断 inner Urteil と見てをるところから明かである。ペスタロッチに依れば宗教生活の核子は、自分のうちに自分を据えてこれに罪を宣告し且つ放免せんとする我が内部の判断作用である。

かくて人間精神の諸相に認識的基礎を認めたとペスタロッチは、同時に一切認識の最後の源を自我の内部に求めたのである。總じて理想主義的思想は最後の内的基礎を缺くところの認識を許さない。Eikennen の Er なる接頭辭は既に吾々の認識がある源から來る事を意味してをる。そのある源とはすなはち自我である。主觀を離

れた外物を許すことの出来ない理想主義に立てば、人間意識は一つの働らきであり、その働らきは外なる対象を受けんとする働らきではなくて、實に内なる我が外なる物に働らきかけんとする能動的な意志の動作である。従つてすべての物に働らきかけ、すべての物を認識せんとする源は自我そのものでなくてはならぬ。「人は萬物の尺度である」と云つたプロタゴラスの言葉は意味深い。先驗哲學者でなかつたペスタロッチ、その教育説を必ずしも先驗哲學の上に打ち築く必要を感じなかつたペスタロッチがかゝる反省を敢てせなだことは言ふまでもない。けれどそはナトルブも斷言してをるやうに、ペスタロッチの教育説が事實理想主義的認識概念を根據として居たといふことを少しも妨げぬ。自我を一切の、而してまた永遠の生産者とする思想は獨逸理想主義の中核で、エクハルト・ルーテルを始めとしてすべての獨逸の宗教的天才哲學的天才、わけて第十八世紀の獨逸思想家が一人の例外なしに奉じたところ。この同じ理想主義を呼吸し體驗し、この同じ理想主義を地盤として教育説を構へたのが、わがペスタロッチであり、従つてペスタロッチが瑞西の地に産れたことは偶々天の過失であつて、彼は當然理想主義の花咲く獨逸の土地に産れねばならない筈であつたと、ナトルブは例のマルブルヒ派風の口吻で繰返すのである。(未完)